

黙示録16章「神ご自身からの激しい災害」

1A 獣の国への災害 1-11

1B 聖徒の血に対する報い 1-7

2B 太陽の炎熱と闇 8-11

2A 神の大いなる日 12-21

1B 全世界の王たちの集結 12-16

2B 大きな地震とバビロンの倒壊 17-21

本文

黙示録 16 章を開いてください。16 章は 15 章の続きです。ヨハネはこれまでにない、驚くべき大きなしるしを見ました。それは、七人の御使いによって、最後の七つの災害を携えているしるしです。大事な言葉は、15 章 1 節、「ここに神の憤りは極まる」ということです。最後であり、これで、人々の犯した悪に対して、究極の裁きを行われます。

ここでの特徴は、神ご自身が災いを地上に下すということです。前回、15 章の最後のところで、神殿が開かれて、そこから七人の御使いが現れたところから分かります。これまではご自身の使いに災いを任せていたのですが、ここでは主ご自身がそのまま御怒りをもたらします。これからの災いは、8 章における七つのラツパの災いに似ていますが、そこでは御使いが香壇からの香を火皿に盛って、それを地上にぶちまけました。祭司が聖所の中で仕える香壇です。

けれども、今回は、至聖所にある契約の箱があるところ、すなわち主なる神の御座のあるところから、そのまま出てきた御使いが災いを下します。ちょうどこれは、王自身がそのまま戦い、敵を滅ぼすようなものです。これまでは、自分の家来たちに任せて敵陣を攻めていたけれども、王自身がやってきて、王直属の家来と共に、敵の王を攻めるようなものです。

主はこれまで、ある意味、抑制して御怒りを示しておられました。すべての憤りを見せるのではなく、人々がへりくだって、神に立ち返ることができるようにするために、抑えていたのです。彼らが神に立ち返ることができるように、猶予を与えておられました。けれども、今はそうではありません。彼らの行った悪に対して悪で報いて、その復讐を完全に果たします。主が、「復讐と報復はわたしのもの。(申命 32:35)」と言われたとおりです。

1A 獣の国への災害 1-11

1B 聖徒の血に対する報い 1-7

¹ また私は、大きな声が神殿から出て、七人の御使いに、「行って、七つの鉢から神の憤りを地に

注げ」と言うのを聞いた。

神殿そのものから大きな声がしています。神ご自身が直接、これらの御使いに命令を下しています。司令官が他の指令系統を全て飛ばして、現場の兵士に命令を下しているような様です。

²第一の御使いが出て行き、鉢の中身を地に注いだ。すると、獣の刻印を受けている者たちと獣の像を拝む者たちに、ひどい悪性の腫れものができた。

神の怒りの対象は、「獣の刻印を受けている者たちと獣の像を拝む者たち」です。イエスの福音を拒み、それで獣による悪魔の偽りを受け入れた者たちです。13章の時にも学びましたが、イエスを自分の主として受け入れないということは、そのまま悪魔の惑わしを信じることを選んでいるということでした。獣の刻印は確かに強制的ですが、イエスを主としているならば、殉教する選択もあったのです。「選ばないというのは、一つの選択」なのです。自分はイエスを主としていないけれども、別に悪魔や獣に加担するつもりはないと、中立を装っても、そうはならないのです。

その災いは、以前、主がエジプトにおいて下しておられたのと似ています。「出エジプト 9:9-10 それはエジプト全土にわたって、ほこりとなり、エジプト全土で人と家畜に付き、うみが出る腫れものとなる。」¹⁰ それで彼らは、かまどのすすを取ってファラオの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と家畜に付き、うみが出る腫れものとなった。」かつて神がエジプトに下らせた災いは、終わりの日には、全世界の規模で行われます。「これは、昔、起こったかもしれないけれども、今は関係ない」ということは、間違っています。主は昔がそうであったならば、今もそうなのだということを知らないといけないのです。昔おられ、今もおられる方です。

ところで、この災いは、出エジプト記において、呪術者に対する裁きでした。「9:11 呪法師たちは、腫れもののためにモーセの前に立てなかった。腫れものが呪法師たちとすべてのエジプト人にできたからである。」とあります。これら呪法師が、モーセの行うしるしに対して、対抗して、同じようなことをやった人間たちです。神のことばに反対して、立ちはだかった者たちです。そういった者に対する怠りない裁きが、ここに現れています。獣の国は、そのまま、神の国のパロディだと、13章の学びの時に話しました。父が子に権威を与え、子が死者からよみがえり、聖霊が子を証されたように、竜が獣に権威を与え、もう一つの獣が獣の権威によってしるしを行いました。彼らが、真理を阻んだのです。そこで、主は同じ災いを獣の国に下しています。

そして、呪法師は、自分たちの体毛のありとあらゆるところをそり落としました。肌に対するケアが、宗教的な意味を持っていました。その肌に対する直接的な裁きだったのです。最も分かり易く、神の憤りを直接的に知ることができるのは、その肌に対して主が打たれることです。

³ 第二の御使いが鉢の中身を海に注いだ。すると、海は死者の血ようになった。海の中にいる生き物はみな死んだ。

第七のラツパの災いのことを思い出してください。海に対する災いがありました。「8:8-9 第二の御使いがラツパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。9 また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。」とあります。つまり、三分の二の海はそのまま残っていたこととなります。けれども、ここの鉢の災いは、全ての海の中の命が死にます。

神は、七つのラツパの災いにおいて、憐れみを示しておられました。彼らを滅びることを最も望んでいないのは、神ご自身です。誰一人滅びることを望んでおられません。ところが、人間の頑なさは、その憐れみでさえ、自分は大丈夫だ、だから神は要らないと強情になります。そして、このような災いを下す神はとんでもない奴だと、冒瀆するのです。そこで主はここで、すべての海を血にようにしました。

⁴ 第三の御使いが鉢の中身を川と水の源に注いだ。すると、それらは血になった。

第三の御使いの鉢は、「川と水の源」です。七つのラツパの災いにおいて、川と水源に大きな星が落ちました(8:10-11)。けれども、海と同じく、三分の一だけが被害を受けています。しかし、ここではすべての水源が被害を受けています。そして、七つのラツパの災いの時は、「苦よもぎ」と呼ばれる、天からの星のようなものが落ちて、それで水が苦くなったとあります。けれども、ここでは、主ご自身が災いを下して、水源はみな血になりました。先ほどの海が血になるのと同じです。

水が血になる災いは、出エジプト記の、ナイル川を血にした災いと同じですね。なぜ、主は水を血にされたのか？ナイル川は神として拝まれていました。水がもたらすいのち、豊かさを象徴していたからです。しかし、彼らは創造主を拝まず、その川そのものを拝みました。それで、創造者がおられることを示すために、その神は死んだ、殺されたというメッセージを、血に変えることによって示されたのです。同じように、ここでは、血を流していることを示しています。

⁵ また私は、水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた。「今おられ、昔おられた聖なる方、あなたは正しい方です。このようなさばきを行われたからです。

「水をつかさどる御使い」がいるとのことです。黙示録において、自然に対して力と支配を御使いが持っている場面が出てきます。例えば、7章において、「7:1 私は四人の御使いを見た。彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけられないようにしていた。」とありました。私たちは、目に見えないため、御使いの存在をそれほど意識しませ

んが、実は、いろいろな目に見えるものに対して、力や支配を神から任されていることが多いのです。イエスが、天の昇られ、神の右の座に着いたことをパウロが説明する時、エペソ 1 章にはこう書いています。「すべての支配、権威、権力、主権の上に(1:21a)」ここでは、水に対して力と支配を持っている御使いがいます。

この御使いが、主をほめたたえています。初めに、「今おられ、昔おられた聖なる方」と言っています。非常に興味深いのは、他の箇所では、「今おられ、昔おられ、やがて来られる方(1:8)」と書かれているのに、ここでは、「やがて来られる」がないのです。なぜか？すでに、ここで主イエスが再臨されているのを見ているからです。将来、主が来られるのではなく、もう今、来られるのだよという、差し迫った状況が反映されています。

そして主は、「聖なる方、あなたは正しい方」です。このさばきの中に、神の聖さと正しさが表れています。私たちが、15 章の学びの時に、じっくり見てきたとおりです。聖なることについて、主は被造物から別たれている方です。けれども、被造物にしかすぎない獣が、あたかも自分自身が神であり、キリストであるかのようにふるまい、その住民も獣を拝んでいます。完全に、神である領域に立ち入っているのです。したがって、主はご自身が聖であることを示すため、別たれていることを示すため、海を血にして、水源を血にしたのです。

そして主は、正しい方です。主は、悪者に対しても恵みを今の時代、与えておられます。悪者にも、太陽の恩恵を与え、また雨も降させます。しかし、そのことによってかえって高ぶり、自分が何様であるかのように思い上がります。神の恵みと忍耐深さを、悔い改めの機会にするのではなく、かえって心を頑なに、心を高ぶらせるために利用しているのです。しかし、主は必ず、公正に世界を裁かれます。悪を行った者には、その悪にふさわしい報いを与えます。

⁷また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ、全能者なる神よ。あなたのさばきは真実で正しいさばきです。」

ここでの「祭壇」の背景には、6 章 9-10 節における、信仰のゆえに斬首された人々の声があります。「子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んだ。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」」この叫びが、確かに、「真実で正しいさばき」と言わせているのです。祭壇にあるのは、火による献げ物の青銅の祭壇は、神の裁きを示しているからです。

私たちには今、分からなくても、主は必ず確かに真実で正しいさばきなのだ分かる時がきます。なので、早まって判断して、「こんな悪いことが、不条理が起こっているのなら、主は信じるに値

しない」と決めつける愚かなことだけは、避けたいものです。

2B 太陽の炎熱と闇 8-11

⁸ 第四の御使いが鉢の中身を太陽に注いだ。すると、太陽は人々を火で焼くことを許された。

ものすごい災いです。太陽の熱によって、人々を焼いておられます。思い出してください、ノアの時は水による裁きでしたが、ペテロは第二の手紙で、次に来るのは火による裁きだということです。「Ⅱペテ 3:7 しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。」

太陽の光というのは、私たちのいのちの源です。しかし、暑すぎてもだめ、少なくて寒すぎてもだめです。その距離、地球の自転、その光と熱の流れにバランスがあって、初めて成り立っている恩恵です。今は恵みの時です。主は、私たちに敵を愛しなさいと命じられて、こう言われました。「マタイ 5:45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」神は今、同じ太陽によって、恩恵ならず災いを与えられます。光と熱の源である方を拒んだら、この方による守りが無い世界に投げ込まれたのです。

⁹ こうして人々は激しい炎熱で焼かれ、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。

「これらの災害を支配する権威を持つ神」とあります。そうです、自然に権威と力を持っておられる方を認めるかそうでないかということが、悔い改めの根幹にあります。神がおられるという、神の主権と力を認めることが、神を信じることの初めです。この災いが下る前に、御使いが永遠の福音を携えて、宣言しました。「14:7 神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」

ところが、彼らが「神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。」とあります。黙示録 13 章にも、冒瀆している獣の姿があります。主が裁かれる時に、へりくだって悔い改めようとしているのに、過ちを犯したら災いを下すということはしません。14 章に、獣の国の者たちについて、「彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上がる。(11 節)」とあります。彼らにもう救いの機会はない、永遠の地獄というのは、ひどすぎると思うかもしれませんが。けれども、主は、彼らが永遠に悔い改めることはないことを知っていて、それで永遠の滅びに定めておられるのです。恐ろしいのは、神が永遠に罰を与えることではありません。もっと恐ろしいのは、そのような苦しみを受けても、なおのこと悔い改めず、むしろ神を冒瀆する、その頑なな心のほうです。

¹⁰ 第五の御使いが鉢の中身を獣の座に注いだ。すると、獣の王国は闇におおわれ、人々は苦しみのあまり舌をかんだ。

第五の御使いの鉢ですが、ついに、「獣の座」にぶちまけられます。ちょうど戦争で言うなら、国の指令室に爆撃を落とすようなものです。獣の座については、黙示録 13 章でさっきも読みましたが、こう書かれていました。「13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がものを言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした。」像があつて、もうひとりの獣が、物が言うようにさせていました。そこに、鉢がぶちまけられました。

すると、「獣の王国は闇におおわれ」とあります。なぜかは書かれていませんが、いわば、首都機能が麻痺したので、国全体が電気を使えなくなったような感じであろうと想像します。そして暗くなる災いは、出エジプト記において第九の災いにありました。

そして、「人々は苦しみのあまり舌をかんだ」とあります。この舌をかむというのは、自殺しようとしてもできない姿です。そして、地獄に堕ちた者たちの「歯ざしりする」という表現と同じ思いを示しています。「マタイ 13:42 火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。」自分の失ったものに気づいた者たちの強い怒りの反応です。「この野郎、糞〜！」と語っている姿です。自己中で、自己陶醉型の人が、自分の思い通りにならなかった時の反応です。

このように、やがて来られる主は、悪に対して容赦ない裁きを下されます。今の時代、私たちは、主の復讐を信じて、怒りを主に任せ、悪に対して善を行うように勧められています。「ロマ 12:19-21 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。20 次のようにも書かれています。「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ。」21 悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

2A 神の大いなる日 12-21

このようにして、第一から第五までの災いが、獣の国に対するものでしたが、獣が、最後の最後のあがきをします。「12:12 悪魔が自分の時が短いことを知って激しく憤り、おまえたちのところへ下ったからだ。」という声が天にありましたが、まさに最後、悪魔が暴れます。それが、終わりの日の「大きな戦(ダニエル 10:1)」のことです。午前礼拝で見た、ハルマゲドンの戦いのことです。

多くの人々は、ハルマゲドンは、黙示録 16 章のこの部分でしか預言されておらず、こればかりを見るのは偏った思想だと思う人々が多いです。事実、異端やカルト、極端な人々には、終末の幻をことさらに駆り立てて、人々に、みこころとは逸脱した行動に駆り立てています。

けれども、悪魔のしわざについて、C.S.ルイスは、こう言いました。「悪魔はいつも、正反対のものをペアでこの世に送り込んでくる。そして悪魔はいつも、どちらが悪いかを考えるのに多くの時間を費やすよう私たちに勧める。なぜかわかるだろう？彼は、あなたが一方の誤りを余計に嫌うことを利用して、あなたを徐々に反対の誤りに引き込むのです」。¹終末の出来事について、偏った誤りのある人々を嫌い、余計に嫌うことによって、かえって、反対の誤り、すなわち、終わりの日に大きな戦があることさえ、見ないようにする、あるいは否定する誤りに引き込みます。

これから説明しますが、ハルマゲドンの戦いについては、まさに預言者たちが終わりの日に起こることとして、数多く語っている幻です。

1B 全世界の王たちの集結 12-16

¹² 第六の御使いが鉢の中身を大河ユーフラテスに注いだ。すると、その水は涸れてしまい、日の昇る方から来る王たちの道を備えることになった。

鉢は、「大ユーフラテス川にぶちまけ」られました。以前にも、9章14節でユーフラテス川のほとりにつながれている四人の天使が解き放たれて、二億の軍隊が人類の四分の一を殺した災いがありました。けれども、これは異なる出来事です。けれども、ユーフラテス川には、悪しき霊どもがいるということは言えるでしょう。

ユーフラテス川というのは、聖書の中で初めから終わりまで出て来る川です。創世記2章、エデンの園からの四つの川で、その主流になっているものがユーフラテス川でした。今は、その源流はトルコ北東部の山地から出ており、シリアを通過し、イラクでティグリス川に合流してペルシア湾に注がれます。全長約三千^キの国際河川です。それから、主がアブラハムに対して、ユーフラテス川沿いのウルの故郷を離れて、約束の地に行きなさいと言われたのは、このユーフラテス川です。ヘブル人というのは、「越える」という意味がありますが、ユーフラテス川を越えてきたという意味合いがあります。そこから、悪しき霊どもによって王たちが軍隊を連れてやってくる、というところに、これが神に対する悪の勢力の最後の戦いと言えます。

そして、その川をさらに越えたところが「日の昇る方」というのは、はるか東にある国々であり、この戦いが全世界を巻き込むものであることが分かります。歴史において、西方のローマ帝国は、ユーフラテス川があったので、東方の勢力の進出をあまり気にすることなく統治することができていました。しかし今、この川が涸れたということは、一気にイスラエルと周辺が世界規模の軍事衝突が起こることを意味します。

気になるのは、現在、ユーフラテス川の水量が非常に減っていることです。大患難においては、

¹ <https://www.goodreads.com/quotes/1290612-the-devil-always-sends-errors-into-the-world-in-pairs--pairs>

一気に滅って、そのまま軍事進出ができるでしょう。そして東からの王たちですが、アジア諸国の世界戦略は中東へと引きつけられています。今、中国は一带一路という世界戦略を持っています。かつてのシルクロードに模した経済圏を広げるものです。そしてその要所に、軍事的拠点も置こうとしています。日本もかつては、第二次世界大戦の時にインドの国境まで勢力を広げました。終わりの日は、このような動きが一気に加速化します。

¹³ また、私は竜の口と獣の口、また偽預言者の口から、蛙のような三つの汚れた霊が出て来るのを見た。¹⁴ これらは、しるしを行う悪霊どもの霊であり、全世界の王たちのところに出て行く。全能者なる神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを召集するためである。

竜はサタン、獣は反キリスト、そして偽預言者は、13章に出てきたもうひとつの獣です。偽の三位一体が動いて、全世界の王たちを惑わします。その方法ですが、「蛙のような三つの汚れた霊」です。蛙は、レビ記11章では汚れた動物とされています。水の中において、ひれやうろこのないものの範疇に入ります。けれども、またなぜ、かえるのような悪霊になるのでしょうか？これは「軍隊の進出をよく表しているのではないか」という意見があります。軍隊が遠征する時は、あるところまで行ってそこを拠点化して、それからまた前進して他のところを拠点化します。その様子が、蛙が飛び跳ねて移動している様に似ているからではないか、ということです。

そして、彼らが行なうのは「しるし」です。これは、世の終わりの時の特徴です。「2テサロニケ人2:9-10 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。」私たちは、基本的に世俗社会に生きています。つまり、超自然的なことは受け入れない社会に生きています。けれども、政治家についての本音ですが、多くがいろいろな宗教や礼拝行為をしています。いろいろな人と合い、会いたくない人にも握手して、心を偽っていることがわかるからだそうです。

今、世に天変地異が起こり始め、国々も激しく騒ぎ立ち、その中で合理的には説明できないことがたくさん出てきています。しかし、その拠り所を、イエス・キリストの福音以外のところで求めていくとき、世界の指導者たちまでが不思議やしるしに惑わされる時がやってきます。

しかし驚くべきことは、これが彼らの戦いではなく、むしろ全ての出来事が、完全に神が掌握しておられる、神の大いなる戦いだということです。「全能者なる神の大いなる日の戦い」と言っています。彼らが神ご自身に対して戦いをいどむために集められるのですが、しかしそのことをさえ神はご存知で、その戦いによって神は彼らに裁きを下されます。

このように、神とキリストに反抗して、王たちが一つになって反抗するということは、午前礼拝でお話したように、詩篇第二篇で預言されています。彼らは一つになって、神とキリストに反抗して、

挑みかかり、戦おうとします。それで 4 節以降にこう書いてあるのです。「詩篇 2:4-6 天の御座に着いておられる方は笑い主はその者どもを嘲られる。5 そのとき主は怒りをもって彼らに告げ激しく怒って彼らを恐れおののかせる。6 「わたしがわたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山シオンに。」嘲られているというのです！なぜかというと、まず人間の王である彼らが、全能者の神に齒向かうことが滑稽であること。それから、神が彼らが一つになって反抗することをういて、かえって彼らを一気に滅ぼすことをお考えになっているからです。

ヨエル書 3 章にも、国々が神によって集められることが預言されています。「ヨエル 3:9-12 「国々の間で、こう叫べ。聖戦を布告せよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。10 あなたがたの鋤を剣に、あなたがたの鎌を槍に打ち直せ。弱い者に『私は勇士だ』と言わせよ。11 周りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。——【主】よ、あなたの勇士たちを下らせてください——12 諸国の民は立ち上がり、ヨシャファテの谷に上って来い。わたしがそこで、周辺のすべての国々をさばくために、座に着くからだ。」ヨシャファテというのは、ケデロンの谷の一部で、オリーブ山と神殿の丘のモリヤ山の間にある部分を指しています。

イスラエルの歴史の中で、既にこの動きに似たものが起こっていました。ヨシュアたちが約束の地に入ってからのことです。彼らはエリコとアイを陥落させました。すると王たちは一つになって、集まって戦おうとしています。「ヨシュア 9:1-2 さて、ヨルダン川の西側の山地、シェフェラ、レバノンに至る大海の全沿岸のヒッタイト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の王たちはみな、これを聞くと、2 とともに集まり、一つになってヨシュアおよびイスラエルと戦おうとした。」彼らは南の王たちでしたが、この後でハツオルの王を中心とする北の王たちが、相集まって攻めて来ました(14 章 1-5 節)。その度に、ヨシュアたちは一挙に彼らを打ち倒すことができました。ですから、彼らは神の働きに相集まって戦いをいどむのですが、その戦いがかえって彼らが一挙に滅ぼされる神の裁きとなっているのです。

¹⁵—見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである—

イエスは、ご自分が来られる時が近づいていることを、ハルマゲドンの戦いの預言を与えておられる途中で語っておられます。主は、ご自身が盗人のように、突如として来られることを弟子たちに警告しておられました。「マタイ 24:42-44 ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。43 次のことは覚えておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。44 ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」このことに基づいて、主は、弟子たちに、「忠実で賢いしもべ」と、「悪いしもべ」について語られました。悪いしもべは、「主人の帰りは遅くなる」と心で思い、仲間の

しもべたちをたたき始め、酒飲みたちと食べたり飲んだりして」います(25:48-49)。

ハルマゲドンの戦いにおいて、主が最後に天から現れるのですが、それは地上再臨です。この時に、突如として来られるのではなく、主が思いがけない時に来られるのは教会の携挙です。これらの恐ろしい出来事から免れるために、主が戻って来られるのです。

そして、「裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように」と言われています。当時、番兵は任務中に寝ているのが見つかると、罰を受けたのだそうです。その罰は着ている物を脱がされ、裸で歩かされるという恥辱です。そのようにならない者は幸いであると主は言われます。これは、イエス・キリストを着物のように身につけていることです。パウロが、主の戻って来られることについて、次のように話しました。「ローマ 13:12-14 夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。13 遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼らしい、品位のある生き方をしようではありませんか。14 主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。」

¹⁶ こうして汚れた霊どもは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に王たちを集めた。

ぜひ午前礼拝の説教を聞いてください。ハルマゲドンが、メギドの山という意味で、そこに広がるイズレエル平野についての説明をしました。聖書の時代にも、その後においても、そこで大きな勢力の衝突が繰り広げられており、今も、そうなってもおかしくない現実味を帯びている話をしました。

今さっき、ユーフラテス川の東向こうの王たちがやって来るという話をしましたが、その代表的なのはイランです。また、中央アジアに広がる数々のイスラム教の国々があります。そしてもちろん、インドがおり、極東には、中国また日本があります。かつて日本は、第二次世界大戦でインドまで進出し、活路を西へ西へと広げていきました。そして今、中国は対一路プロジェクトを行い、まさに中東と欧州を中国からつなごうとしており、軍事的拠点も置こうとしています。

この王たちの集結があれば、次に、荒らす忌まわしい者が、ユダヤから荒野に逃げる、イスラエルの残りの民を追って、エドムのボツラ、今のヨルダンのペトラのほうに軍を進めます。それから、最後には、エルサレムを全世界の軍隊が攻めます。主は、イスラエルを救うためにボツラに向かう軍隊に戦い、エルサレムを攻める世界の軍隊に対して戦い、これらを滅ぼします。黙示録では、19章にて、王の王、主の主として来られる、白い馬に乗ったイエスご自身が、口から出る剣で戦われ、軍隊のしかばねをもって、猛禽がその死体を喰らう、神の大宴会があることを教えます。

2B 大きな地震とバビロンの倒壊 17-21

この最後の戦いがある前に、獣に支えられている大きな都があることを、黙示録は教えています。

14 章で、大バビロンが倒れることを御使いが宣言していました。「14:8 倒れた、倒れた、大バビロンが。御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都が。」この都を、これまでにない大地震で倒壊させる災いが、最後の、第七の御使いの鉢の内容です。

17 第七の御使いが鉢の中身を空中に注いだ。すると大きな声が神殿の中から、御座から出て、「事は成就した」と言った。

神が、鉢の中身を「空中」にぶちまけさせていますね。空中は、悪魔は悪霊どもが支配していた領域で(エペソ 2:2)そこに影響を与えるためであったと考えられます。そして、主なる神ご自身が御座から大きな声を上げておられます。「事は成就した」です。これで全てのことが終わりました。子羊が父なる神から巻き物を受け取って、その封印を解いた全ての事柄がここで成就したということです。ここがクライマックス、全てのものが集結し、集約され、そして完成します。

この同じ言葉を、主は以前、十字架の上で語られました。「完了した」と訳されていました。ギリシア語で、テテレスタイです。贖いについて、主は十字架の上でそれを完了されました。ここで主は、裁きについて、それを完了させたのです。

18 そして稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、大きな地震が起こった。これは人間が地上に現れて以来、いまだかつてなかったほどの、大きな強い地震であった。

大患難の終わりには、ここにあるように最も激しい天変地異が起こります。イエスは、オリブ山でこう説明されました。「ルカ 21:25-26 それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。26 人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。」黙示録は地震だけ記していますが、天も激しく揺り動かされるようなものです。そして、これが人類の歴史最大の地震になります。

19 あの大きな都は三つの部分に裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。神は大バビロンを忘れず、ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた。

大バビロンは三つに裂かれて倒壊します。そして大事なのが諸国の民の町々も倒れるのです。なぜなら、大バビロンによって、世界の経済が成り立っていたからです。次の 17-18 章で、主は詳しく、大バビロンの姿を見せられます。このバビロンを忘れないとありますが、それはバビロンによって、聖徒や預言者の血が流されたからです。こうやって、主は激しい憤りの杯を与えられました。

20 島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった。

七つの封印のうち第六の封印が解かれた時に、大地震が起こり、「6:14 天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山と島は、かつてあった場所から移された。」とありました。ここでは、もうすべて見えなくなったとあり、場所が移されたところではない大異変が起こっています。

²¹ また、一タラントほどの大きな雹が、天から人々の上に降った。この雹の災害のために、人々は神を冒瀆した。その災害が非常に激しかったからである。

雹による災いです。ここで「一タラント」は 35kg ですから、とんでもない大きなです。しかし、もっと恐ろしいのは、この災いにあっても彼らが神を冒瀆することです。

これが、悔い改めの余地が残されていない、頑なな心の状態であります。私たちはどこかで、「この人にもっと目で見える機会が与えられたら、悔い改めるかもしれない。」という期待を抱いてしまいます。しかし、ここで見れば分かるように、地上において地獄を経験しているのに、それでも悔い改めないのです。これが、永遠の地獄の姿であります。非常に苦しくて歯ざしりさえました。しかし、神を罵ることしかしません。神は憐れみを示されても、憐れみを拒む者たちには、憐れみなしの無慈悲しか残りません。

私たちは、今、恵みの時に生きています。まだ、救われる機会のある時に生きています。「Ⅱコリ 6:2 神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」今、まだ光があるうちに、光のところに来ます。そして、救いとは、罪と不義に対する神の怒りからの救いです。「Ⅰテサ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」ペテロも、五旬節の時、聖霊が降った後に、彼のことばを聞いて悔い改めたユダヤ人たちに、「この曲がった時代から救われなさい。」と勧めました(使徒 2:40)。